
頑張るマイペース君

豆腐畑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頑張るマイペース君

【Nコード】

N1009J

【作者名】

豆腐畑

【あらすじ】

ちよつと、というかかなり変でマイペースな主人公が友人の異世界召喚に巻き込まれます。勇者より強い？元から最強？ラブラブ？王様からの依頼を遂行するため、人生を楽しむため、今、彼は・・・何をするのか？

ほのぼの、微シリアスな異世界ファンタジー。主人公最強物です。そういった物が苦手な方、読まれるのはご遠慮した方がよろしいと思います。

作者は遅筆で初心者です。それを踏まえた上で多くの方に読まれて

いただけねば幸いです。

プロローグ さらば、日常（前書き）

作者は初心者ですのでできるだけ暖かい目で見守って下されば幸いです。

この小説で何か不自然な点、誤字脱字などがあればどうかやんわりと、さねど

見逃さずにご指摘下さい。

ブローグ さらば、日常

ん、眠い。そして周りが五月蠅い。

ま、それもそのはず

今は修学旅行の時に乗っていくバスの席決め。

一般の高校生には修学旅行の中身よりも大切な事だ。

しかし、おれは”一般”ではないらしい。

らしい、というのは、俺自身は自分が普通だと思っているのだが

数少ない友、潮留 練が言うには、

俺、時雨 蒼は容姿端麗（といっても練自身も容姿端麗だ）、

運動神経抜群（これも練に当てはまる）、

頭脳明晰の一見パーフェクトボーイだが性格がかなり特異で

超が付くマイペースで、優しいようで冷たく、

たまに周りの人が近づけない雰囲気を出しているらしい。

さらには悪口や皮肉を相手と面と向かって（無意識に）言ってしまう癖がある。

確かにかなり変だ。自覚無いけど・・・。

「おい、蒼、一緒の席になろうぜ。」

練が俺に声を掛けてくる。はっきり言って一人がいいけど、数少ない友達。
しょうがない。

「ん、ほんとには1人がいいけど。練と一緒にいる人いなくなっても可哀相だからいいよ。」

「ひどい！なにその俺には友達がないみたいなた台詞。
というか、一人がいいってどんだけ冷めてんだよ。」

練がかなり整った顔を歪めながら文句を言ってくる。

俺に容姿端麗とか言ったくせに自分の方がイケメンじゃないか。

しかも今だって女子の半分以上が練（と少し俺）をチラ見してる。

こいつは重度の鈍感だ。告白を告白と気付かないほどに……。

相談役のこっちの身にもなれってんだ!!

練との付き合いは小学二年生からだ。(ちなみに今は中三だ)

さっきも言った通りおれは無意識に悪口や皮肉を言ってしまうため
そこまで友達が出来ない。

その点では練も変人なのかもしれない。

考え事をしてる間にもう部活だ。俺と錬はサッカー部でもちろんレ
ギュラー。

うちの中学は俺達の代は全国に行くほど強い。応援にはいつも黄色
い声援があるほどに。

まあ、大体が練目当てなんだけど。

しかしもうすぐ引退かあ。なんか寂しいなあ。

三年間も居るとそれなりに愛着わくよね。多分卒業すればすぐ無く
なるだろうけど。

そんなこと考えているとすぐに部活が終了してしまう。

部活を終えて俺と練は帰路に着く。

帰り道の途中、練と雑談しながら歩いていた。
隠し持っている携帯を見る。

・・・は、八十三件！？誰からだ。

・美羽姉 二十三件

・茜姉 二十件

・桃姉 十五件

・紫苑姉 十五件

・麻衣 十件

あのブラコンどもがあー！返信できるか！

その時、いきなり眩い光が現れる。

周りの木が風にざわめく。

「う、うわぁー！！」

いきなり練が悲鳴をあげる。
そこまであわてることか？

そんな事を考えながら練の方を見よつとしたときだった。

「がしっ！」

「は？」

いきなり腕をつかまれる。そして物凄い力でひっぱられ、俺達は光に吸い込まれた。

嗚呼、引っ張り込まれそうになったから悲鳴をあげたのか。

巻き込まないでよね。と、呑気に考えながら俺達は光に包まれた。

ブローグ さらば 日常(後書き)

作者は遅筆です。週一程度に更新させていただきます。

1：頭の回らない奴は足手纏い（前書き）

すみません。こちらの不手際によりこちらの小説がファンタジーではなく

文学になっていました。多くの皆様にご迷惑をお掛けした事をお詫び申し上げます。

1話、プロローグだけではあまり物語が分からないと思いましたが投稿いたしました。

1：頭の回らない奴は足手纏い

目も開けられない程の光。

これが、異世界トリップってやつかなあゝ、
とか考えてた時だった。
耳ではなく脳に微かに聞こえた声。

《へゝ、勇者意外にもおもしろいのがきたね。

今回は結構おもしろそうだね。》

「は？」

なんだ、今の。男か女が分かんなかった。

そっちかよ！

その時、いきなり光が無くなった。そして一瞬の浮遊感、落下。

落ちたのは地面ではなく、

「「うわっ
「

「バツシャーンー!!」

水だった。

「冷た、・・・嗚呼、もう。ジャージがビチャビチャだよ。」

「え、そこっ！普通周りの状況でしょ！」

練が五月蠅い。んなの俺はどうでもいい。それよりジャージだ、ジャージ。

結構気に入ってたんだけどな。

「あ、あの・・・。」

あ、声掛けられた。このソプラノな声は女の人かな？

「あ、はい。」

練が答える。俺もその女の人に目を向ける。

そこにいたのは水色の腰辺りまであるおろした髪。

さらに整った顔に水色の瞳。背は155センチメートルほど。

つまりは美少女だ。俺は興味ないけど……。

うん、案の定その子は練の顔を直視して顔を赤くした。

そしてその子をそんな状態にした練はそれを見て首をかしげる。

……鈍感め。

2人が見詰め合っつてしまい話が進まない。

こういうの嫌いだ。嫉妬とかじゃなく。なんていうか、全てを俺のペースにしたくなる。

「お二人さん良い雰囲気のところ申しわけないけど、ここは何処で、何のために“練”を呼んだの。」

「え？あ、す、すみません。えっと、私の名前はイリア・エリミウス・ルーゼンベルグ、

ルーゼンベルク王国第三王女にして巫女姫です。

ここは先も申し上げたとおり、ルーゼンベルク王国王都にある王城レイシアの召喚の間です。

あなた方をこの世界に呼んだのは最近現れた魔王を勇者として倒していただくためなんですが・・・」

「何か問題が？」

練は駄目だ。状況についていけない。

だからメンドイけど俺が状況を理解しなくちゃいけない。

「いえ、問題というか・・・。歴代の召喚された勇者様は皆一人、それに召喚の術自体光の属性を」

持つ者を1人呼ぶ物なんですが……。」

「二人来ちゃったと。」

「はい。」

ん〜、ここまで聞くとかなりテンプレ。けど二人来ちゃったのは

「それはね、こいつ、あ、こいつ潮留 練ね。こつち風に言つと練潮留。」

んでもって俺はこつちだと、蒼 時雨。よろしくね〜。

で、二人来たのは本当は練だけだったんだけど、こいつが吸い込まれる瞬間に

俺の腕をつかんでさ、巻き込まれちゃったんだよね。だから勇者はこいつだよ。」

ふい〜、久し振りに長々と喋った。疲れるな〜。

そういえば、ここ王城なんだっけ。本物・・・、ちょっと嬉しいかも。

こんなの一生に一度あるかないかだもんな。今のうちによくみとかないと。

部屋を見渡してみる。俺達がいるところは水が膝ぐらいまでたまってる溜池みたいな所。

で、イリアちゃんがいるのは水の溜まっているところから一段上がった場所。

俺達との距離はさほど遠くない。部屋自体の広さは学校の教室くらいで、

水と床が半々くらいの割合になっている。

「そうなんですか。ただ、レン様のみを勇者様にするかどうかは

私めには決めかねます。何分いままででない事なので。」

ん〜、まあ、しょうがないでしょ。

じゃあ、イリアちゃんが決めないとすると、
決めるのは・・・

「ですので急ですが、今から王に謁見してもらおうこととなります。

「え？えと、分かった。というより何でお前はそんな冷静なんだ？」

あれ？そついや、そつだ。なんでだろ？なんか普通に受け止めてた。

うーん、やっぱりあれかな、携帯小説でこういうの読んでたからかな。

でも普通は多少動揺するよな。俺ってやっぱり変なのかなあ。

「さあ？俺が変人だからじゃん？」

「なっ、どついつ理屈だよ。」

五月蠅い。俺だって分かんないんだ。無視だ無視。

「おあ、行いし行いし。」

俺はイリアちゃんを促して召喚の間から出る。

「あ、おい！待ってくれよ！」

それも無視して俺は部屋から出る。

イリアちゃんから教えてもらった事。ここはオールイ大陸と呼ばれていてこの大陸には

大きな人間の国、大国と呼ばれるものが四つ、

今俺達がいる魔法が盛んなルーゼンベルグ王国から商業で発展した
コロア王国、

冒険者等が多く集まるミオムルナ皇国、

そして大陸の中で最も領土が広く、軍事力も大きいレイグルパレス帝国があり、

その他約十個の小国が存在する。

今のところ何処の国もそれなりに豊からしく戦争が起きる様子には無いらしい。

勇者は代々魔王が現れる度にルーゼンベルグ王国が召喚していて、

勇者達は例外なく光の属性の魔法が使える、身体能力も大幅に向上し、

また魔力量は大魔法使いのおよそ五十倍の量になるらしい。

さらに、勇者は“使い魔”を召喚、契約する。

そして、使い魔の協力と共に魂に存在する異能力を発現させる。

異能力は勇者特有の聖なる光を操り、呪いを解いたり魔法を防いだり悪しき闇を滅ぼす力と、

その人特有の能力が一、二個存在するらしい。

魔王はここ数年に現れ、魔物、魔族を引き連れ人間達に攻撃を開始したらしい。

魔物は魔力を持ち、獣よりも凶暴で手強いやつらのことで、姿は獣を大きくしたり少し形を変えたようなものが多い。

魔族は魔物の上位種でそのほとんどが高い知性を持ち、人語を理解し、

人型またはそれに近い姿をしており、高位の者になるとかなり強力な魔法を扱ったりする。

魔法は主に二種類あり、一つは詠唱魔法といって、自分の魔力と大気中のマナを使い

意識の中に魔術式を構築、呪文の詠唱によって発動させる。

詠唱魔法はそれぞれ簡単に効果が弱いものから低級、中級、上級、古代魔法となっていく、

他に傷を回復したり呪いを解いたりするものを神聖魔法という。

これらは熟練者になると難易度は上がるが無詠唱で発動させることも出来るようになる。

もう一つは精霊魔法があり、精霊、龍などが使え、

ごく稀に精霊と契約した人間が使えることがある。

精霊魔法を人間が使う場合、消費する魔力は精霊が負担し、詠唱を精霊と人間の掛け合いでおこなうらしい。

精霊魔法を使えるのはこの国でも数人程度らしい。

そして魔法の属性。これにも階級があり、まず自然現象などを司っている基本の属性、

火、水、氷、風、雷、土があり、その上に人間の真理を司る光、闇がある。

基本属性には優位性があり（時間が掛かるからとおしえてくれなかった。）

光と闇は優位性は無く

優劣は使い手により変わり、使える者もすくないそうだ。

光の特徴は、護り、受け入れ、被い、照らし出すこと。

闇の特徴は、破壊し、侵食し、縛り、暗闇に隠れること。

魔法は光と闇の属性以外魔力があればどんな人間でも使えるが、

その人特有の相性があり、その相性が高い属性が最も効率よく、

なおかつ威力も高く使用できる。

光と闇属性も使えるかどうかは相性だがこれは相性のいい者しか使えない

こんなところかな。もっと聞きたかったけど練の頭がパンクして

これ以上は無理だった。・・・足手纏いめ。

「おい、速く来いよ。」

練が一際大きな扉の前で俺を急かす。もうこれで二回目だ。

どうしてこんなに遅れているかというところ、イリアちゃんの説明が終わった後、

俺は城の内装をよく見ながら歩いたので二人とかなり差が開いたのだ。

練とイリアちゃんのイチャイチャしてる声が聞こえてたから道には迷わなかった。

内装？うーん、大国とは思えない程質素だった。うん。

なんか灰色！って感じ。城より街っていうんで街に活気があるんならいいけど、

これでもし、街もそんなに活気無かったらここ大丈夫かなあ。

「やっと、来たよ。ほんといつもおまえは……。なあ、そっぴや、

俺達元の世界帰れんのかな。」

練が真顔で心配そうに聞いてくる。

「さあ、でも来る魔法があるならこっち側から行く魔法もあるんじゃないの。」

まあ、俺はあっちの世界に未練無いから帰れなくてもいいけどさ。」

「おいおい、それじゃ、家族にあえないぜ。蒼。」

「俺はあんなブラコンの巣窟かえりたくない。」

俺んちの家族構成は姉三人妹一人に俺両親だ。

あの姉妹は・・・、駄目だ、考えるだけで吐き気がする。

簡単にいえば重度のブラコンだ。

そんな風に練と雑談しているときだった。

「あ、ソウ様もお着きになられましたか。では王に謁見していただきます。」

あ、あとソウ様のことはすでに報告済みですのでご心配なく。それでは……。」

「あのさ、俺達王への礼節知らないけどどうすりゃいい？」

練がイリアちゃんを遮り質問する。

え、別にこの世界の住人じゃないんだから礼節なんてよくね。メンドイし。」

「嗚呼、それでしたら、レン様方のお国の礼節でかまいません。」

「ふん、そう。じゃ、行こうか。」

「はい。それでは。」

そう言つてイリアちゃんは細かな装飾のされた大きな両開きの扉に
向き直る。

「私は第三王女イリア・エリミウス・ルーゼンベルグ。
異界より召喚されし

勇者様及び勇者様のご友人をお連れしました。」

イリアちゃんがそう宣言？すると両方の扉が重たく開き始める。

全て開き切つたあとイリアちゃんは優雅に歩き始める。

それに続き練も歩き始める。

一応かしこまって歩いてるな。練のやつ。

蒼も歩き始めるがその歩き方はいつもと変わらず、

さもどつでもいいというふうに歩いていく。

その歩調はイリアや練に全く合わせず自分のペースでゆつくりと。

目もあつちこつちを見渡している。緊張感などありはしない。

蒼は静かに微笑んでいた。

1：頭の回らない奴は足手纏い（後書き）

どんどんどご感想を下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1009j/>

頑張るマイペース君

2010年10月11日18時40分発行